

アコンカグア西壁・遭難記

馬目弘仁 (松本クライミングクラブ)

1999年1月9日・アコンカグア南壁を目指してメンドーサを出発、そしてまず高所順応のため南西面に入山した。

順応に使うノーマルルートは巨大なトレッキングコースといった印象だった。登山基地となる Plaza de Mulas (4,400m)のキャンプ場は、夏の涸沢を何倍にも広げたようであり、様々な国籍のトレッカー達が集っている。1km程離れた所には何十人も収容出来る巨大な山小屋 (Hotel Refugio) が建っている。氷河の末端がすぐそことは思えない喧騒だった。

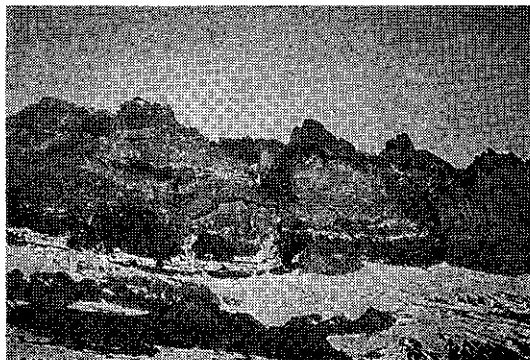
13日、さっそくノーマルルートでの高所順応の準備に取り掛かった。私達は、常駐の山岳警備隊へ毎日の気象情報を聞きにいていたが、「今シーズンはエルニーニョの影響が大きく、十数年ぶりの大雪」という話であった。事実、Camp Berlin (頂上アタックの最終避難小屋, 5,950m)の様子は、想像を全く越えていた。通常この辺りでは全く雪は無く、ジョギングシューズでも歩けるようだが (頂上アタックですらアイゼンは不要という話も聞いた)、行ってみると積雪は深い所で腰近くにまで達していた。さらに気温もかなり低く風も強かった。トレッキング感覚で登りに来ている多くの登山者は、上部キャンプに閉じ込められ、高山病や凍傷を悪化させて困惑しているように見受けられた。私達は悪天候のなかでノーマルルートごときに体力を使う気になれず、6,100mまでで順応はよしとして早々に降りてしまった。

異常なシーズンとはいえ、私達の南壁登攀意欲は衰えなかった。天候待ちさえすれば可能性はあると気楽に考えていた。やはり心のどこかでアコンカグアという山を軽くみていたのかもしれない。22日、南壁へのアプローチ分岐点となるキャンプ場・Confluencia (3,368m)へ下りた。ところがその晩から雪、辺りは真っ白になってしまい2日程停滞を余儀なくされる。ここで、先日まで南壁基部まで偵察に行っていたという木村功次郎氏に出会い、情報を得ることが出来た。「頻発する雪崩と深雪により壁に取り付くことすら出来ない」ということだった。さて、どうするか？ 南壁基部に行つて己の目で確かめてみたくはあるが、その日数的余裕はなくなってしまった。帰りの航空便の予定がおしてきている。次回の挑戦のために壁だけでも観察しておこうという気にはまるでならなかった。とにかくクライミングがしたい、どんな壁でもいいから取り付きたいという衝動は抑えがきかない。結局もう一度 Plaza de Mulas に上がり、ひとつあっさりとして西壁でも登ろうかということで落ち着いた。

西壁は懸垂氷河がなく、傾斜も総じて緩い。現在3本のルートが拓かれている。私達は、La Ruta de la Tapia del Felipe (通称：メンドーサルルート) を登ることにした。これは深く切れ込んだ顕著な

クロワールをたどるアイスクライミングルートだ。
3ピバーク以内には帰ってこれるだろう。

出発前夜、ホテルでささやかな前祝いディナーをいただきながら、すぐその丘といった感じの赤く染まった西壁をゆっくりと眺めた。私達のルートは雪の筋を追っていけばよい。ホテルの壁に張ってあるポスターの西壁は雪らしき白色が皆無、まるで砂漠に浮かぶ古代の城塞のようである。やはり今シーズンは異常に雪が多いのだ。「かえってガレ場より雪がある分登り易いんじゃないか。落石はないしアイゼンも減らんでいいかもね。」と、お気楽にワインで乾杯した。まったく自業自得である。



アコンカグア西壁
中央のクロワールがメンドーサルート

27日午前2時、西壁登攀開始。出発点は前日に確認しておいた。Plaza de mulasから一段下りた地点(4,200m)だ。ここからだとも上部の巨大なクロワールへダイレクトに登っていける。ロープは結ばず、ダブルアックスを交えて急峻なガリーを適当に登る。空が白みはじめた頃には傾斜も落ち、長く単調な斜面を登っていた。雪は表面だけが固くて踏みしめるようなラッセルを強いられるので意外と疲れる。

F 1、長さ80m、幅100m/傾斜60°のベルグラの滝だ。ここは2 P程ロープを刻む。そして幅150mを越える広大なクロワールをラッセル。西壁のくせに割合に日が差し込むので正午近くなると膝下位の雪がベチャベチャとなって足を取られる。この先クロワールは猛烈に狭まり、なんと大同心の大滝そっくりの氷瀑に収束される。礫を含んだ壁に深く穿たれたその道すじはなんとも不思議な地形だ。ガウディの聖家族教会または、巨大な燈台の螺旋階段を登っているようだ。

F 2、約30m/90°、砂利が混じっていて全体に黒っぽいアックスが良く刺さる。続いて核心部となるF 3が待っている。ルートが屈曲しており先が見えないのでバンド状をトラバースし、本流から外れた所にテントを設営した。(標高5,450m)

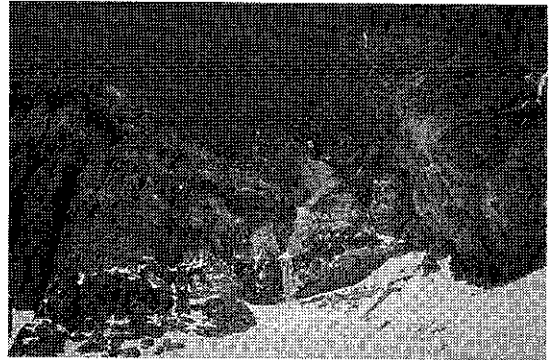


F 2、30m/90°
ツララの集合体の登攀

28日、無風快晴。安全を考えて明るくなってから登攀開始。

F 3, ねじれた洞窟状の滝。1 P, 50m/60° 雪面から氷瀑の根元まで。2 P, 50m/85° 氷瀑の出口まで。この先はまたクロワールが広がり(幅100m以上), 傾斜は45°位で, 高差を稼ぐには都合がよい。氷瀑以外はロープを結ばずに行動した。

F 4, 30m/70° (標高5,700m)。スノーシャワーがひどい。クロワールを寸断するように所々にロックバンドがあり, そこが狭い漏斗のようになって氷瀑を形成しているようである。この辺りから, 乾いた雪がガレた斜面になじんでおらず浮石に神経を使う。そのことに2人とももっと注意すべきであったのだが.....。そして最後の難所, 圧倒的にハングしたロックバンドに到着(標高6,100m)。2人とも疲れた。ハングに守られた吹きだまりの少ないバンドにテント設営。



H : 約5,400m
中央下部にF 2が見える

29日, 快晴, 気温は-20℃位だろうか。本日はこの落差50m以上/幅200m位ありそうなロックバンドを越える。大小様々な礫を含んだカラフルな地層が積み重なったこのオーバーハングはおぞましいものがある。右手の岩稜から大きく迂回するルートも考えられたが, それでは約300m近くもトラバースしてまた折り返すことになりそうだった。それならばダイレクトに突破の方がかっこいい。

まずは最も落差の小さいバンドに取り付いてみたが岩が脆すぎて手も足も出ない。そこでハングはきついが岩の堅そうな右寄りから登ることにした。10m程ノープロでハング下に達し, 微妙な体勢でピトンを打った。効いてない。それをスタンスにして慎重にハングを越える。墜落は絶対に許されない。手袋が破れ指先が剥き出しになってしまったが凍傷にはならないという確信はあった。第一関節がかかればためらいなくフリーで登った。この岩に限っていえばエイドは不確実すぎる。やっとハング上部の堅い一枚岩に達した。A 4, 5.9はあっただろうか。6,000mでもそれくらいは出来るんだぜという強烈な自負が込み上げる。しかしユマーリングで後続する乃村さんは体が冷え切ってしまって辛そうだった。高所の日陰, やはり気温は相当に低いのだろう。忍耐のビレイに感謝した。2 P, ベルグラに覆われたスラブを登るとやっと日の当たる雪面に抜け出ることが出来た。解放感に包まれる一瞬だ。後続する乃村さんも笑顔だった。

時刻はもう午後に入ろうとしている。ここでしばし休憩。行動食を食べながら素晴らしい景観を堪能する。アンデスは広大だ。この先傾斜は一気に緩くなっており, 頂上稜線(南西稜)はすぐそこにある。残りの標高差はあと約750m足らずで, その半分程は目の前の雪田を使って登ってしまえそうだ。明日は下でビールが飲めると, お気楽気分であった。「もう, いらんねえ。軽くしねーかい?」

「そーやねえ。捨てても惜しくないぐらい傷もいっとるし。」と、それぞれのアイススクリュウを天空に勢いよく放りなげた。次いで傷のいった方のロープをハング下に捨てた。勿体無いものを気前よく放るという行為はこんなにも快感だったとは。お互い気持ちよく笑った。

雪田の積雪は踝から膝下位で、雪は乾いていて抵抗がなく順調に登高していた。先程のハングから300m以上は進んだ所だと思ふ。突然私の足元から前方に向かって一直線に亀裂が走った。そしてガラスが割れる様をスローモーションで回しているかのように雪面が剥がれてきた。咄嗟にアックスとハンマーのシャフトを打ち込む。2秒位か、耐えられそうだと感じた瞬間に視界が消えた。仰向けで頭を下に向けて流された。雪が顔面を覆い、ザックのチェストベルトに胸を締め付けられ、窒息しそうな息苦しさのためにもがこうと必死だった。苦しい、ただそれだけしか考えられなかった。おそらく数秒間の出来事だったのだろうが、やっと止まった。体は仰向けのままだ。雪は浅いようだ。手で顔の雪を払おうとすると左腕が動かない。だが手は握れ、肘も曲がる。体をよじってザックを脱いだ。周りを見ると、とても静かだった。乃村さんは？10m位離れて真横にいた。私が引きずっていたロープにグルグル巻きになってうめいていた。助かった……。前方には先程越えたばかりのハングの落ち口がわずか30m先にあった。後ろを見上げると、遙か300m位先に綺麗な細い帯状となった雪崩の破断面がみえる。それは100m以上の横の広がりがあった。救いは上積の積雪が10cm位だったからだろう。私達は、雪崩に取り残されるようにしてこのハングの縁に止まったようだ。もう少し規模が大きかったら2人ともジャンプ台からアンデスの天空に放りだされていたことだろう。

なかなか動きださない乃村さんのところに寄っていった。左足が動かんと言う。「折れとるかもしれへん。」ええーっ、そりゃやばい。動く方の右腕で助け起こそうとしたが自分の左腕もかなり重傷のように思えた。しばし自己点検、2人とも骨折してはなさそうだと感触を得るとまたヘタッと座り込んでしまった。

雪崩に流されている際、乃村さんはロープが体に絡みついで身動きがとれず、恐怖倍増だったようだ。左膝は途中の岩に跳ね上げられてしまったらしい。頭はその先のハングのことでいっぱい「止まってくれえ！」と祈っていたそうだ。これが人生5回目の雪崩遭遇だと言ってすっかり肩を落としてしまった。だが直ぐにアイスハンマーを失ったことに注意がいく。そうだ私もアックスがない！買ったばかりの最新鋭機だったのに……。捨てた道具、拾った命より失った道具のほうが気になるものなのかな。命の保証がいっぱい詰まったザックが無事なだけでも幸せなのだ。

さて、これからどうしたものだろうか。このまま頂上経由で帰るのが一番理想的で安全に思える。だが、乃村さんは自力で立ち上がるのも大変な苦痛を伴う様子だ。同ルート下降しか方法はない。そうすると先程捨てたもう一本のロープが惜しい。スクリュウと一緒にデポしておけば使えたのに。後悔先にたたずだ。シングルロープではこのオーバーハングを懸垂下降するのは不可能だ。考え込んでいてもしかたがない、とりあえずハングの縁に移動して下をのぞき込んでみた。すると、なんと所有

5. 登山記録

り難いことにロープが岩に引っ掛かっているではないか！雪崩の本流から外れていたために流されなかったらしい。これで安心して帰れる。同じ生還するなら楽な方が有り難い。「俺の棄て方がよかったのかな？」あまり神に感謝したりはしない私達だった。

ロープを固定し、ほぼ50mいっばいの空中懸垂で降りた。ハング下の不安定なトラバースを片腕でこなしてロープを回収した。乃村さんがダブルロープにセットし直して降りてくる間に、昨晚のビバークサイトにテントを建てた。時刻は3時、まだ当分明るいけど今日はここまでだ。座り込む乃村さんを見てみると膝の痛みが伝わってくる。這いずってテントに入る姿が痛々しい。私の方は左腕を上げようとするのが激痛がはしる。私は、帰国してからフリークライミングが出来なくなったら悲しいなあとしみじみ考えていた。だが食料、燃料は十分にあるし、天候も崩れる気配はない。まさしく命綱となるロープも得た。片腕と片脚の自由を奪われたがそれ程のハンデでもないだろうと楽観することが出来た。歴戦の乃村さんに対する信頼もとても大きい支えになっていた。その晩は軽く冗談を交わしながら安心して早々に眠りについた。夜中肩の鈍痛で目が覚め、ついでに小用に起きた。腕が上がらないのでシュラフから這い出るのも一苦勞だ。さらにまた体を押し込むのに20分あまりも格闘することになった。明日も割りと苦勞するかもなあ、とやはり少し暗くなった。

30日、3時に起きた。出発の準備は一苦勞だった。お互い痛みをうめきながら撤収した。さて、乃村さんは全く歩けず、私はザックが担げない状態だ。下降方法については昨日のうちに段取りを決めておいた。まず赤いシュラフカバーを取り出し、そのなかにザックの中身をいっばいまで押し込む。2本のロープを繋いで100mに伸ばし、その先にこの巨大なニンジンと乃村さんが結び付く。それを私がいっばいまでローダウンするのだ。伸ばした所で乃村さんがビレイアンカーをつくり、そして私がクライムダウンするというシステムだ。ブルーシートを使った雪上搬出訓練をイメージしたら思い付いた。お互いアックスとハンマー1本づつしかない。ハンマーを乃村さんに手渡した。

下降1P、ほかに手がなく雪面に差し込んだアックスがアンカーだ。ギシギシ音を立てて持ち上がってくるアックスのヘッドを必死で踏みつけながら乃村さんとニンジンを降ろしきった。心臓が汗ばむようだ。出だしの雪面は氷壁と言ってもよい位に堅く傾斜もきつい。次は私の番だ。後ろ向きのフロントポイントで慎重にクライムダウンを始めた。シングルアックスなのでバランスが難しい。スリッパしたらせっかく助かった2人分の命が無駄になる。次第に連続動作に慣れてくると空身のせいもあり片腕しか使えないが思ったより楽に感じられてきた。この「ニンジン転がし」は具合がいいと2人とも気を良くした。下降ペースも普段のクライミングのように淡々としたものに落ち着いてきた。だが状況は変わらない。雪面を100m真っ直ぐに降ろすのでランニングビレイは全く取れない。アンカーは礫が抜け落ちて出来たポケットにキャメロットを無理矢理効かせたものだ。予断（油断）は許されない。とにかく集中することだ。

順調、すばやくF4に到着した。ここは懸垂するしかない。手持ちのロックピトンは5本、それにキャメロットが3個、アイスフック2本が全部だ。アコンカグアの壁はビスケットのように粉っぽくて信用ならない代物だが、ここは確実に打ち込んだピトン1本でよしとする。次のF3へ続く斜面も長く急峻だが、堅く安定しているので予想より降りやすかった。安全をみてF2の1P手前から懸垂下降する。F3を降りるためのアンカーはアイスフックしか使えない。念のためアックスでバックアップを取るが、セカンドは完全にそれ1本にぶら下って50mの懸垂下降する。2Pで2本を使い切った。

次いでF2。ピトンを使って懸垂下降する。時計を見るとまだ午後1時だ。半日で700m以上も稼ぐとは速い。帰りの航空便にも間に合いそうだし、ひょっとして今日中にBCまでたどりつけるかもしれないと淡い期待が沸いてきた。次の雪面から傾斜が落ちてきた。雪もかなり腐り、思うように滑らなくなってきた。乃村さんはニンジンにまたがって橈を漕ぐように片脚で奮闘している。さらに待ち受ける緩傾斜面で苦勞しそうな気配に淡い期待は吹き飛ばされた。F1までたどり着くのにかなり時間がかかった。

F1は氷が発達していて様子が一変し、100m以上の懸垂下降が必要のようだ。落ち口はベルグラが発達していて容易に近づけない。結局50m懸垂下降し、次はロープを80m分に切って残置フィックスすることにした。残り20m位を予備ロープに手元に残した。さすがに今回はロープを棄てるのには慎重になった。ここまで降りてくると安全に立って歩ける程の傾斜になり、ロープを解くことにした。もうPlaza de mulasのテント村の様子がはっきりとわかる所まで降りてきた。既に私達の関心は「生還」から「あと7日間と迫った帰りの航空便」に移っていた。状況が好転すると次の事で頭がいっぱいになる。

今度は私がニンジンを引くことにして、乃村さんはなんとか自力で降りる努力をした。だが傾斜が緩くて思うように滑らない。F1を降りてからもう2時間になるが斜距離で300m進めたかどうかだ。業を煮やした乃村さんが転がり始めた。その様子を見ていたら胸が痛くなった。安全地帯でこんなに苦勞するとは。この場での最善策は何か？最も重要なことはなんだろう？現状はかなり楽観できる、この場所からなら這ってでも帰れるだろう。とすれば解決すべき問題はやはり「帰りの航空便」しかない。それを失うことは貧乏な私達には大変な痛手だ。悩んだすえに乃村さんに相談した。彼にはもう一晩ビバークしてもらい、私がPlaza de mulasまで単身降りて(3~4時間で到着すると踏んだ)常駐の山岳警備隊に要請して手を借してもらおうと話した。帰国便に乗るには逆算すると明日にはBCへ降りていないと厳しい。乃村さんも似たようなことを考えていたらしく「ほな、よろしく頼むわ。」という調子だった。だが心情的になかなか踏ん切りがつかなかった。一つはパートナーをルート上に残して降りるという行為の罪深さ。もう一つは「救助要請」ということだ。私達はその時点から「敗退」ではなく「遭難」ということになる。せつかく自力で降りてきたのにそれもなんだか悔し

5. 登山記録

い気がする。だけど、そんなプライドより帰国便のほうが重要だ。迷った末単身降りて救助要請することに決めた。安全なテラス状の台地にテントを設営し食料とガスコンロを確認して下山した。

下山ルートは、登高ルートを使わずに、大きくトラバースして一般ルートに合流することにした。このルートならヘッドランプの電池が切れても安心して下降できる。実際こっちのほうが楽だった。約4時間後、午後9時頃Plaza de Mulasに着いた。息も整える間も惜しんでまっしぐらに警備隊のテントに向かった。遅い時間だったが隊長兼ドクターという英語の通じる人がいて助かった。隊長とテントの外に出て西壁を見上げると乃村さんを残したテントに明かりが燈っていたので簡単に位置の説明が出来た。これで一段落だ。私の肩も診察してくれ、「鎖骨が脱臼しているようだが骨折の可能性もある」ということで包帯で腕を吊ってくれた。当然、明日は救助隊に加わずに安静と言い渡された。その晩は食事までお世話になり、人の親切が身にしみた晩だった。

31日、快晴。救助隊が出かけてから私も登っていった。しばらくしてポーターレッジを御輿のように担いだ一団と合流できた。御神体となった乃村さんは困惑したように笑っていた。元気そうな姿をみて私は緊張の糸が切れて少しホロッとしてしまった。その一団は昼前にPlaza de Mulasに到着した。すぐさま乃村さんはドクターの診察を受けたが早急に精密検査の必要ありとなり、Puente del Inca（最も近い村）まで即刻下山することになった。ゆっくり話も出来ない程慌ただしく乃村さんはロバに乗せられ、連れ去られるように下っていった。残された私はBC撤収の各種手配を済ませ、警備隊とボランティアで協力してくれたアルパインガイド2人に礼をした。（救助費用は登山料に含むという形式で、基本的に無料。）

2月1日、自分の怪我と疲労の具合をおもって夜明けを待って早々に下りることにした。荒涼とした砂漠を独りぼっちで歩いていると色々な考えが浮かんで消えていく……。途中から風が強くなり小雪が舞いだした。どうやら本格的な大荒れだ。私達は運がよかった。もし下降中に降雪があれば、きっとあのクロワールは雪崩地獄と化していたに違いない。

標高差約1,700m、距離30km以上を独りで歩き通して、夕方遅くに乃村さんの待つPuente del Incaのホテルに着いた。今回の登山の中で最もハードな一日を終え、乃村さんからは「顔が変わった」と言われる程に疲れ切ってしまった。だが、また2人でゆっくりと飲めるビールがすこぶる旨い。なんだかとても穏やかで幸せな気分になって、こういうのもまたよしかないとなづきながらビールを注いだ。